

探究型研修

独立行政法人教職員支援機構 審議役 佐野 壽則

備忘録①…探究型研修って？①

この頃、「探究」や「探究型研修」って、どういふものか説明するのが難しいなあ、どのように説明すればいいのだろうと考えることがけっこうありました。

恐らくプロセスとして説明するしかないんだろうなあと思い、試みに、描いてみたのが、次ページの囲みのようなストーリーです。備忘録として残したいと思います。

探究型の研修は、この事例における友人の役割を担うものではないかと思えます。

また、このストーリーにあるように、自身の新しい「在り方」が見えてきた時、ハウツーを学べる研修やオンデマンド動画などの研修教材¹が役に立つと思えます。

備忘録②…探究型研修って？②

もう一つ例を挙げたいと思えます。こちらは、働き方改革に関する探究型の研修についてです。

働き方改革については、学校現場で、様々

な取組が行われており、文科省が作成している事例集²では、様々な好事例が掲載されています³。また、文科省からは、これまで学校教師が担ってきた業務を、「基本的には学校以外が担うべき業務」、「学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務」、「教師の業務だが、負担軽減が可能な業務」の三つに分ける考え方も示されています。

こういった事例や考え方を文書として配布したり、研修を通じてそれらを紹介したりする手法には、一定の意味があると思えます。

ただ、働き方改革を進める上では、そのようなアプローチだけでは難しいことが多いかもしれません。学校における働き方は、ハウツーや考え方の整理を適用すれば進むわけではなく、教職員、保護者、子供や地域住民の異なる「価値観」を擦り合わせる、もう少し深い過程を必要とする課題だからです⁴。

働き方改革について正面から取り上げた平成三十一年の中教審答申⁵は、長時間化勤務の要因を分析しています。そこから分かる

いる問題の構造だと思えます。こういった、立場や考え方によって意見が異なり、「みんな」が合意できる解決策がなかなか見つからない問題群は、「やっかいな問題」と呼称されることもあります。

こういった問題に向き合うには、それぞれの考えをすり合わせ、期待や負担の「程度」を調整していくプロセスが必要になります。教職員、保護者、地域住民、子供たち、それ

ぞれが持つ「教師観」や「学校観」、「職業観」などを全くテーブルに乗せずに取り組もうとしても、取組手法は無限にある中どれを優先するか決められず、取組を始めても、「教師が楽になっていないか」などといった不満の声が上がったり、取組自体が目化したりする状況になりかねません。

この点で、例えば、愛知県のある中学校⁶で進められた働き方改革のプロセスは、参考

分で選びたいと思っているのかもしれない」

彼は、友人の話を聞いて、はじめ愉快ではありませんでした。ただ日が経つにつれ、確かにそうかもしれないと思うようになっていきました。生徒からの受けが悪いと思えば思うほど、声を張り上げ、板書を詳しく書き、用意した教材をしっかりと読んでもらおうとする自分、生徒を縛ろうとしている自分がいることに気付いたのです。

そのような気持ちを経て、彼はこれまでと違う授業のやり方に挑戦するようになりました。一番の変化は、生徒がそれぞれの関心に沿って調べる時間を、できる限り取るように心掛けたことです。自分として伝えたいことはあるし、教科書は当然使うけれど、生徒が自ら学ぶことを選べる時間を大事にすることで、かつての海外への冒険旅行がそうだったように、面白く学んでもらえるかもしれないと思いました。

こういった授業を展開するために、彼はiPadを活用しようと思いい立ちました。iPadを活用することで、生徒自ら情報を集めることができるのではないかと思ったのです。話題になっているChatGPTも、情報収集のために使える場面があるかもしれないと思いました。

そのような授業を展開するためには、彼自身がiPadやChatGPTを使った授業展開が必要があります。彼は、ICTを使った授業方法について解説した書籍を購入したり、オンデマンド動画を見たり、「こんなやり方もあるのだな」と思いました。また、彼の様子を見ていた校長から、県の教育センターでICT活用授業をテーマとした選択研修があることを教えてもらい、早速、申し込みました。

彼の授業は、以前より柔らかくなり、徐々に、意欲的に学ぶ生徒が増えていきました。生徒の変化に嬉しくなり、今彼は、書籍を読む中で存在を知った、学びの自由度が高いとされる「単元内自由進度学習」に挑戦してみようかと思いつつあります。

ここに、ある中堅の教師がいたとします。中学校の社会の先生です。学生の時に、バックパックを背負って多くの国々を訪れて感動した経験から、生徒に外国の面白さを伝えたいと思ったのが、彼が先生を志した原点にあります。

彼は、初任の時から、いい授業をしようとし、分かりやすく板書を構成することや、生徒の興味を引く教材を用意することを心がけてきました。その甲斐もあり、教職生活一〇年目になった頃には、授業力のある教師として、校長や同僚から一目置かれる先生になっていました。

彼の教職生活が暗転したのは、一一年目のときです。この年、彼は初めて「生徒指導困難校」に赴任しました。どういうわけだが、彼がこれまで培ってきた授業のやり方が、この学校の生徒には入っていきません。板書の構成を変えたり、教材の中身を簡単なものにしてみたり、様々な工夫を試してみたものの、うまくいきません。退屈そうではあっても、話を聞いてくれる生徒はまだよい方で、ずっと寝ていたり、すきを見れば隣の生徒とおしゃべりしたりする生徒が増えていきます。校長や同僚も、彼のことを心配するようになっていきました。

彼は、悩みました。

幸いだったのは、良き教師仲間がいたことです。初任の学校で一緒だった教師で、学校が変わってからも折に触れて近況を報告し合っていました。

彼は、自分の悩みを吐露します。ひとしきり話を聞いたあと、その友人は言います。

「君は、自分の経験や教科書の内容を、生徒にしつかり伝えたいと思っているんだね。自分でそんなに教材を用意しているなんて、素晴らしいよ。ただ、それって、本当に、生徒が関心を持っていることなのかな。学生時代、君は、自分で選んで色んな国を訪問したから、面白かったのかもしれないよ。もしかすると、生徒は、何でも用意されるよりも、自

「勤務時間の中で終わらせたい」など）、子供の本音の声を聞いたり（自分のレベルに合った活動をしたい）、「もっと楽しくしたい」など）したとのことです。

対話を重ねる中で、徐々に、「最上位に置くべきなのは、授業ではないか」、「子供が自己決定して部活動に関わることを、大事にしたい」、「先生の生活も大事にしたい」といった学校として大事にしたい視点が醸成されていき、議論の結果、平日の部活動を、四日間から三日間に、一日最長二時間だったのを一時間半に短縮するとともに、顧問主体から生徒主体へと運営の仕方を変えていこうと取り組むようになりました。また、働き方改革により生まれた時間を使って、新しい授業の展開方法に取り組む教師が出てくるようになったとのことです。

働き方改革の一つの難しさは保護者との関係ですが、当初は、教師から「保護者に説明するのが、少し怖い」という言葉が出ていましたが、学校として大事にしたい視点が醸成されていく中、保護者と話そうとする雰囲気も作られ、学校運営協議会の場などで対話し、共通理解を得ていきました。その他の働き方改革の取組の成果もあり、この学校の時間外勤務時間は半減しています。

協働探究をテーマとした探究型の研修は、この学校で展開されたような、自身および自身の組織の「在り方」を考えながら、課題の本質に向き合う取組を後押しする研修だと思えます。

例えば、「やっかいな問題」に向き合うには、

それぞれの考えをテーブルに乗せ、自身や自身の組織の「在り方」を考える時間や空間が必要であることを体感的に理解したり、協働探究を進める中で「気付き」を共有し、取組を支え合う場を提供したりする研修です。

なお、この事例の学校を支援した「先生の幸せ研究所」の澤田代表は、冒頭紹介した「働き方改革事例集」について、「通常ベースでは『ふーん』で終わるが、この学校のように改革を一回しした後だと、形にする力が付いているので、『できそうなものが沢山ある！』となる」と言います。教職員集団の中に、課題の本質に向き合う状況が生まれた後には、ハウツー的な知識が生きてくるということだと思えます。

ここで挙げた事例は、教職員が協働で探究する事例です。教職員自身が、時に探究型研修に参加しながら、多様な者の価値観が絡み合う課題に、協働的、探究的に取り組んだ経験は、学校を活性化させるのみならず、子供が協働的に探究する営み（例えば、特別活動、生徒会活動、部活動など）に教職員が伴走しようとする際、必ず活かして行くのではないかと思います。

△注▽

- 1 なお、NITSでは、オンデマンド動画を数多く提供しているが、これは、参考書などと同様、研修プログラムや自己研鑽の中で活用される「研修教材」であり、「研修」そのものではない。
- 2 文部科学省「全国の学校における働き方改革事例集（令和五年三月改訂版）」
- 3 ICTを活用した校務効率化の事例、会議時

間を縮減した事例、業務分担を見直した事例、学習評価の観点からの見直し事例など

4 「技術的課題」と「適応課題」

5 「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（答申）」（平成三十一年一月二十五日中央教育審議会）

6 具体的には、以下の通り（下線は筆者による）。

- ・家庭や地域の教育力低下に伴い、学校に対する過度な期待・依存や、多様な家庭の存在が指摘されている中で、本来であれば家庭や地域でなすべきことが、学校に委ねられてきており、「日本型学校教育」の下、学校及び教師が担うべき業務の範囲が拡大されてきた。
- ・学校や教師は、児童生徒の様々な姿を通じて理解を深めたり、家庭環境が厳しい児童生徒に社会性を身につけさせたいという、子供のためにという強い使命感と責任感から、自校の児童生徒や自身が担任となった児童生徒に関わるあらゆる業務を自らの業務とみなして、結果的に業務の範囲を拡大し続ける状況に陥っている。

教師の中には、部活動にやりがいを感じている者もいる一方で、競技等の経験がなく部活動の指導に必要な技能を備えていない教師等が部活動の顧問を担わなければならない場合には負担を感じている。一部の保護者による部活動への過度の期待等の認識を変えるため、入試における部活動に対する評価の在り方を見直し等も検討すべきである。

- ・周年行事等、地域の記念行事の要素が大きい行事の準備は、簡素化し、教育委員会や保護者・PTA、地域等が中心となって行うようにすべきである。さらに、実施すること自体は教育上必要な行事についても、その一部については、教育的意義を超えて、地域の誇りや伝統等の理由で、教師が授業の質の向上に取り組めないほどの負担を強いられることはあってはならないことであり、地域が望むのであれば地域等が中心となって行う行事に移行すべきである。
- 愛知県江南市布袋中学校